

教育委員会

コラム Vol.27

教育長室の窓から

読書



読書は充実した人間を作り、会話は気がきく人間を、書くことは正確な人間を作る

これは、イギリスの有名な哲学者の言葉です。

さて、本町の学校教育では、学校の実情に応じて、朝の読書、読み聞かせ、読書まつりなどの取り組みを行っていましたが、昨年度後半からより一層、読書に力を入れるように校長会などでお願いをし今年度に引き継いでいます。

学校の授業では、「音読」（声に出して読むことで、文章を丁寧に読み内容をより深く理解しやすくなり、単語の意味や正しい漢字の読み方を意識し語彙が豊かになります。）「黙読」（声に出す制約がないために、自分のペースで読めるとともに、すでに内容を理解している文章を再確認したりする際に効率的です。）を取り入れています。一般的に、低学年から高学年・中学校に進むにつれて音読から黙読になっており、私たち大人は、ほとんどが黙読かと思います。

読書の秋と言われる季節になりました。読書には「ストレス解消・リラックス効果」「視野の拡大・心の豊かさの涵養」「語彙力・文章力・表現力の向上」「知識や教養の獲得」「論理的思考力の育成」などと脳に様々な良い効果があることが知られています。また、町PTA連絡協議会では、「やぶさめ（きもつき80・2・30）運動」の一環として、30分間テレビを消しての読書や親子の対話を、町内の全家庭で勧めています。

家庭での読書（家読）をすることは、家族のコミュニケーションの増加、子どもの読書習慣の定着、子どもの成長（語彙力、想像力、思考力など）につながります。

ぜひ子どもたちと一緒にお気に入りの一冊、作家、ジャンルなどを・・・

教育長の

ちょっといい話

教員は何ができるか？



過日、一緒に勤務した同僚から、月刊誌に取り上げられたエッセイが届きました。その同僚は、私が校長の時の教頭です。東日本大震災・福島原発事故の際には、校長として子どもたち、教職員に関わった方で、「原発事故の被災者となった子どもたちに、私たち教員は何ができるのかを考えさせられた。」という言葉から始まる内容でした。

特に「放射線教育」についての記述を読み、私も当時を思い出しました。線量計、サーベイメータ、シーベルトなどの用語を初めて知ったのも恥ずかしながらこの頃でした。

エッセイの内容の一部を紹介します。

「放射能や放射線について正しく知り、正しく怖がることを指導した。これからの人生で放射能の影響がある地域で育った子としてエビデンスのない偏見にさらされた時、正しく説明し、自分を守り、大切にできる人間になるように。」

放射線教育とは、主に学校教育において、児童・生徒が放射線に関する科学的な知識を身に付け、正しく理解することを目的とした教育活動です。文部科学省が作成した放射線副読本（小学生用、中学生・高校生用）などの教材を活用し全国で行われています。